11
408

三宅憲章翁

始

三宅憲章翁

羽城　井上一　編

呉郷文庫藏版

帝國圖書館藏
大正 9. 12. 28 内交

種蓄其
益有時

而大

文六貫題

序

唯唯而隨捷捷而趨同乎流俗合乎汙世者世謂之才而三宅君之所嗤罵也其客崖然其狀義然高行而舜步者世謂之德而又君之所不屑為也嗚呼君有此識見與氣節故生

於名醫之家頗通羣籍而不肯為儒醫懷抱大志而終生不能伸之不遇以歿悲夫余不及識君而與其友岡本韋庵鹽谷石樵二翁為忘年交石樵翁言直而行潔獎進後生君之好義愛才何其相似也韋庵翁卓落豪爽不以

利害得喪為趨舍君之氣雄才大又何相似之甚也而二翁亦不得志而終以二翁交道之不苟而思君之非常人因二翁之不得志而知君之所以不遇於時矣然遇與不遇固不足以為士之輕重而自古豪俊奇傑之士以不遇而其

名遂不傳者不少矣則余區區爲言者豈獨爲君乎哉頃者君傳成讀之有感於其爲人焉乃題一言君名憲章實舞村先生之令弟云

大正九年十一月　對南岡本由撰

我家三百年來能受天福長
壽又多兒百事此如意更致
幾千春獻禱莫辭勞
恭祝
家兄舞村君古稀壽
不肖弟
憲章
拝具

(三宅憲章翁遺墨)

故三宅憲章翁

糸子刀自

三宅憲章翁

羽城　井上一編

緒言

瑠璃を湛へたらむ如き吉野川の碧流、西より來りて、遠野の山裾に遮られ、稍々北して彎狀を畫き、又東に向つて、やがて穴吹川を合す。その弓と弓弦との間、土地肥沃にして、桑麻を長するに堪ふ。之を舞中島と云ふ。今美馬郡三島村に屬す。脇町へは、川を隔てゝ十丁にも足らず。德島鐵道穴吹驛よりは十數丁の地なり。

南は劍山山脈の大小皺襞、眸前に迫りて、高越種穗の名山も程遠からず。北は讃岐山脈を迎へて、龍王大瀧妙體の諸峯、指顧の間に在り。三宅憲章君、此間に生る。君、資性慧敏、弱冠にして大志を抱懐す。徐ろに世潮の趨く所を察し、稜々の奇骨、夙に書劍を抛ち東奔西走、大に陶朱を學はんとす。而も事志と違ひ、坎軻不遇、常に窮巷破窟に嘯傲し、晩年纔かに病院の經營に任して、海南の小乾坤に雌伏し、只鬱懐を斗酒に遣るのみ、成敗の跡を以て論すれば、未た大に稱するに足る者なきも、其の心事を察すれば、復一世の快丈夫なり。具眼達識の士なり。今その遺韻を訪ね、餘芳を捜りて、些か古人の面目を偲はむとほりす。

家系

王侯將相寧ぞ種有らむやとは、是昔、年少氣を負へる唐土人の喝破せし所。然れども科學の發達し、遺傳學の進歩したる現今に於ては、豈復此る放言を容さむや。自己は祖先の延長にして、子孫は卽ち自己の分身なり。祖先の血管に流れたる生命の泉は、永く其の子

孫に影響す。されは家系の詮索も、全く徒爾の業なりと謂ふ可からず。

三宅氏は、元佐々木盛綱に出つ。盛綱の子孫、備前に在りて、兒島氏を稱す。南朝勤王の名將兒島高德も、其の一門なり。後、萬之丈高基といふ有り、遷りて阿波に來り、居を舞中島にトす。其の曾孫文庵に至り、始めて醫を業とす。是れ寛文年中の事たり。更に三傳して玄達に至る。玄達諱は高義、字は子玄、玄々と號す。大に家名を揚ぐ。岡本監輔、嘗て之を紀傳して曰く「先生、資性豁達英偉、重瞳人を射る。弱冠諸國に周遊して、醫學を研究す。京師に入り、菅子產、山脇東洋、和蘭人某を師とし、旁ら儒學を修む。寶曆中、業を浪華に開く。其の方術古今に兼達し、最も外科に長す。嘗て大和國法隆寺主僧、及ひ紀藩の大夫、伊豫松山藩の大夫某等の癈疾を療す。松山藩の大夫の子孫、常に其の祖の遺言を記し、特使を發し來りて、君が德に報する數世、文政天保年間に及びて、未た嘗て怠らさる也。先生業を開いて、治を請ふ者門に盈ち、門外、人市を成す。而も獲る所の藥價

酬銀、率ね諸を貧者に給し、一錢を儲へず、家屢々貧を告く、善庵君衰老するに會ひ、郷に歸って奉養す。四方治を請ふ者倍々多し。安永六年丁酉二月廿四日病歿す。年五十有七。先生病を療する暇、日を定めて教授す。其の掲示に言へる有り。曰く、一六は素問、二七は傷寒論、三八は易古註、四九は千金方、五十は難經と。且つ曰く、古今漢蘭の醫方、疑ふ所の者有らば、須らく門を叩いて來り質すへし、親疎を論する勿れ、經史詩集亦皆其の欲する所に隨ひ、務めて講習するを要すと。其の

學、以て想ひ見る可き也。先生、嘗て富永獨嘯庵と友とし善し。獨嘯庵、書を先生に贈りて、其の遊寓中教誨を辱うするを謝す。又華岡隨賢と善し。隨賢の發憤、學に志したるは、實に先生の奬勵に由る。隨賢の手書に言へる有り、屢々示教を受く將に志を決して、教を奉し、以て長崎に遊ばんとす、當に左右に侯して奉辭すべし。願くは尊書を煩はし、西海の諸先生に傳達せんとをと。其の聲望の盛なる、以て想ひ見るべき也。先生軀幹短小、而して胆氣精悍、眼烱々人を射る。嘗て西遊し、

夜に乘じて行く。賊數人、將に來りて、已を刼さんとするに遇ふ。先生目を瞋らして之を叱す。賊皆披靡す云々」と以て其の人と爲りを知る可し。玄達、子なし。兄文右衛門の子丈達を養うて嗣となす。又醫名あり。紀の華岡氏と並ひ稱せられぬ。丈達亦性寡慾、酒を嗜む。窮者治を請ふ者あれば、施藥の外、或は米錢を給す。丈達の子、高頼。早く歿す。高頼の子、高經。醫業を紹ぐ。通稱は速水。即ち憲章君の父なり。杏堂と號す。又英偉夙成。浪華に遊び、洋醫の術を橋本宗吉に學ぶ。文久三年歿す、年六十一。

予、一日三宅氏に過ぎる。庭前老槇矗立する者三幹。其の大なる者は、合圍五尺六寸。他之に亞ぐ。凡そ槇の樹たる、成長極めて遲緩。而るに此の老大を致す、以て其の年處を經ると頗る古きを知る可く、亦家系の一端を語る者と謂ふ可き也。

生立

德川幕府の政も、やう〳〵末濁りて、內は財政の窮乏に苦み、外は黑船の來航に脅かされ、諸藩また物情穩

かならず。殊に弘化三年、仁孝天皇崩御あらせ給ひ、孝明天皇踐祚。翌年即位の式典を擧けさせ給ひし頃より、露船米艦などの近海に來往するもの益々繁くなり行き、三百年間の鎖國政畧に、桃源夢濃かなりし島帝國も、いよ〳〵開港の機運を迫出せんとす。次て嘉永と改元あり。其の年の十月なりき、四山の木末色づきそめて、小鹿妻呼ぶ秋闌の十日といふ日。速水氏の繼室横山氏、弄璋の慶事あり。是れ即て憲章君の誕生にして、幼名を三藏と呼ぶ。醫家にして儒者たり、書家にして詩人たりし舞村氏の異母弟なり。生れて穎悟、極めて剛愎、人後に安んずるを好まず。家柄のことなれば、幼き頃より村夫子住友才助に就きて習字を學び、又大塚嘉則の門に入りて、讀書劔道を習ふ。學業日に進み夙に秀才の目あり。十五六歳の頃、附近山村より、腫物の出てたる一患者來りて治を請ふ。速水氏不在なりしかば、門人ども之を診するに、頗る重きか如し。門人何れも手を下しかねて躊躇へるに、時既に薄暮、患者は早く治を得て歸路を急かんとす。憲章君之

を見るや「よし予得て之を切開せむ」と云ふ。門人危みて之を止むるに「醫家に生れて斯ばかりの腫物一つ得切らで何の顔かある」と直に刀を執りて之を切開し更に聽する所なかりき。門人等その豪胆なるに舌を巻きたり。斯かりしかば、其の才識の俊秀なること、愈々郷黨の間に知られ、明治二年徳島藩が西の丸に長久館を設け、以て文武の學校となし、次て洋學所醫學所をも是に併すや、君は徴されて洋學所に入り、又出藍の譽あり。次て東京に遊學し、明治五年蜂須賀侯の歐洲に遊ふや、從遊の内意を傳へられしも、辭して應せず。當時、兆民中江篤介、新に佛國より歸朝し、一代の新智識として名聲嘖々たり。憲章君思へらく、今や我邦は、廣く世界の列國と交る可き時なり。大に力を語學に注がざる可からずと。乃ち卒先中江の門に入りて、佛蘭西語を學ぶ。其のルソーの民約論等の新學説は、如何に功名に燃ゆる青年の心理を動かしたりけむ、當年讀み古るしたる民約論其他十數册の原書は、君が老後まで其の身邊を離さゝりき。

斯くて業成り、帷を淺草の梅堀に下して徒に授く。從遊の少年青年頗る多し。乃ち家政炊爨の事自ら見る可からず。一日良媒を得て、舊幕府麾下の士、鎌田兼次郎の長女以登子を入れて室となす。時に明治九年なり。以登子温良貞淑、而も才氣あり、伉儷最も厚く、內助の効頗る多し。斯くて專心育英の事にのみ從はんには、君も亦明治の一教育家として、餘りに波瀾なき生涯を送りたらむも知る可からず。然れども今や當代の潮流は、滔々として一方に奔注す。君の器局の大と、識度の宏きとを以て、區々讀書生を養はんことは、餘りに覇氣なく、餘りに閑事業たるを免れず。心機の一轉せさらむ事を望むも得んや。

事業計畫

君もと醫家に生れ、漢學の素養既に深く、次て佛蘭西語を學び、造詣する所あり。其の當初に於ては、學者又は大官となりて、家名を揚けんと期したらむ。然れども世變は人物を作り、時潮は人心を變せしむ。夫れ一

代の風雲遽爾に捲き、人々戎軒を事とするに當りて、は、野武士も英雄と化す。今や狂瀾漸く收り、世は平靜に歸せんとす。而して海外商工の殷盛は我邦の遠く及ばざるを知るに及んでは、有識の士、如何でか悚然として自邦の貧弱を省み、富國の策を講ぜんとを思はざる可き。官海學海共に以て棹すに足らず、大丈夫正に大に殖産に努め、以て國富の充實を期せざる可からず。君乃ち書劍を抛ちて商賈となる。是れ明治九年の事にして、信州伊那郡大鹿村に岩塩の産出する

者有りと聞き、同志集堂某、木村重信、工藤金八、黒部洗次郎等と議り、自ら實地に出張し、之が採掘を試む。當時同志の資力、元より豐かならず。皆無經驗なる商業を營みつゝ、其の僅少の所得を以て、之が經營の資に充つ。されば維持頗る困難。會々一朝暴風雨の襲來する有り、土砂崩壞し、連月苦心して掘鑿したりし十數箇の塩井は、一時に埋沒し去りて、復手を下さんに由なし。資力遂に繼がすして廢滅の止むなきに至る。其の採取塩標本は、今尚三宅氏に存し、尚當年の辛苦を

語る者の如し。

密使

明治十年西南の役起るや、國内騒然。各地不逞の徒、薩軍に呼應せんとする者あり。又義勇兵を起して、官軍に加はらむことを請ふ者あり。君既に實業界に入り、富の創造に熱中す。是を以て、昨年熊本神風連の乱起り、次で前原一誠が山口の變ありしも、冷然看過して、更に關知せざる者の如し。然れども其の實業界に入りしは、畢竟憂國の志念に基く。今大西郷が、薩南の健兒を率ゐて、風雲を巻かんとするを見ては、死灰も亦燃えざるを得ず。遂に小室信夫の命を含みて、九州に赴き、密かに國事に奔走する所あり。乱平いで後、明治十一年復小室の紹介により、大阪日日新聞社に入り、操觚者たらんとす。而も此夏脚氣症に罹り、醫師は轉地療養を勸めて止まさるを以て、居ること幾許もなくして郷里に歸る。

歸郷

時に王政復古して既に十年、人々新智識を求むるに

汲々たる者あり。而も風を變へ俗を移すは眞に難し。彼の斷髪を以て、我が日本魂を銷磨し、我か祖先の美風を汚損する者となし、髪を結ふ風更に渝らず。舞中島の如きは、未た一人の新を趁ふ者なき也。三宅氏の支配人に幾太と云へる老爺あり。憲章君の歸郷するを聞き、悦んで之を迎ふるに、其の頭髪は復我か古來の風にあらず。老爺之を見るや顰蹙し、斯る外夷の風に倣ふ者は、我か三宅の邸内には入る可からず。若し之を容さば祖先の怒りを奈何せんと。峻拒して門内に入らしめず。憲章君苦笑、諄々として說くこと霎時。幾太も漸くにして首肯せりと云ふ。

昔は猶太の子、イスラエルに言擧げして曰く。地に泰平を出さんが爲に、我來れりと意ふなかれ。泰平を出さんとにはあらず。刄を出さんが爲に來れり。夫れ我が來るは、人を其の父に背かせ、女を其の母に背かせ、媳を其の姑に背かせがん爲なりと。先覺者の俗間に入るや、衆愚は每に之を危險の者となす。今憲章君の新智識を以て郷里に歸る、復此の感あるを免れず。驚

異の眼を睜つて之を迎ふる者、豈啻に老爺幾太のみならんや。寒梅凍雲此年も暮れて、柏酒春盤東風柳條を舞はせ、黄鳥聲朗かに暖信を傳へんとする時。また三宅氏に一波瀾を生じぬ。乃ち憲章君病全く癒えて、再ひ東京に向はんとするに際り。其の異母兄舞村翁の長子、速氏を拉し去らんとす。速氏時に年甫めて十二。憲章君、舞村翁に說きて曰く。我が家は世々外科に名あり。紀の華岡氏と併へ稱せらる。今や新興の學術を研鑽し、精を究め徹を穿つに非ずんば、終に世潮に

乘す可からず。家名を失墜せざらむと欲せば、速をして夙く學者の淵叢たる東京に出てしめ、四周の刺戟激しき地に置きて、切磋琢磨の功を積ましむるを要す。漫に草深き田舍に老いしむるは、彼が大を成す所以に非ずと。舞村翁稍々之に聽く。然るに姻戚某氏、力を極めて之に反對して曰く。此の年少の者を雲山萬里の地に送り、琢磨の功未だ成らずして却つて風塵に老いしむる事なきか。三宅の家聲と資產とを以てすれば。現狀の儘にても事足りなむと。頻りに抗爭し

て止まず。憲章君徐に利害を說き、辯論讓らず。遂に之を說伏して、速氏を携へて東に去れり。三宅氏の一門は素より、鄕黨の間に於ても、爲に非議一時百出せりと云ふ。而も速氏の今日有る。實に此の憲章君の强硬に胚胎せり。

苦鬪

大丈夫の活社會に處する、其の精神と共に汝の筋肉をも勞し、自ら額に汗して以て口を糊すべし。徒らに舊弊に泥み、安逸を貪るを以て能事となし、悠遊を樂むを以て高尙となすが如きは、吾徒の耻つる所なりとは、當時憲章君の念頭に固持せし信條なりき。然れども、少壯より、只讀書に親しみしのみにして、售るべき方伎を有せず。將た商賈の事に習はず。殊に採擴事業に失敗したる創痍の尙未だ癒えざるあり。速氏を携へて上京したるも、元より邸弟を有するに非ず。陋巷の白屋に假寓し、僅に雨露を凌ぎ、冷竈寒厨、貧味の饒多なるに堪へず。乃ち一時築地の平野活版所に、校正部員を求むるを聞き、自ら進んで之に入る。然れど

も彼等尋常の商賈、何ぞ此の卓落狷介の質を直諒するを得んや。君を遇するに、他と一様の奴隷的待遇を以てせんとす。既に膝を五斗米に屈するを屑しとせざる者にして、如何でか之に甘んずるを得べき。數月にして之を罷め、貧益々甚し。然れども幸に骨の逾々健なる有り。或は稻田邦植氏の聘によりて、北海道に赴き。又獨逸人と謀りて、石炭販賣の業を横濱に營み、健闘努力、席煖なるに遑あらず。漸く一家屋を蠣殼町に購ふに至る。明治十五年、葡萄酒の樽材を佛國に輸出せんとを企て、之を一帆船に滿載して搬送せしむ。船偶々印度洋に至るや、暴風雨に遭ひて顚覆破壞し、全部流失す。君笑うて曰く、天未だ我に福するを欲せざるかと、其の殘材は總て薪料に供して止む。又政府が村田銃製造の擧あるを聞き、其の木材料の提供を請負ひ、信州より盛に搬出したるに、不適品なりとて採用せられず。爲に又失敗を重ねたり。加之一友人の負債をなすに連署し、聯帶債務を負ひて、三十餘圓の辨償を要する事となり、一時小康を得たる生計は、又

復窮乏に陷り、遂に其の家屋を賣却するの止むなき至れり。君斯る窮境に在るも、日常物品を賒ふを許さず、負債を生ずるを嚴戒し、假令自家の衣服器具一切を擧けて之を失ふに至るも、更に憾む所なし。是を以て令室の如き、常に自ら小店舖に至り、一升二升の白米を購ひ、三錢五錢の木炭を小買したる事有りと云ふ。實にや雄飛の志を懷ける者にありては、淤泥の地寧ろ不染の心を生し、窮迫の境却つて卓厲の氣を揮ふ。轗軻の中に在りて更に怨まず、失敗を重ねて益々邁進す。其の間速氏を私立學校に送り、外國語學校に入らしめ、更に高等學校より大學に進ましめ、督勵怠らず。以て其の志を見るべき也。

蠣殼町の家を失ふや、一商店を賃して下谷に移り、學用品荒物等を販く。地池端小學校を距ると一丁餘。店頭常に人を絶たず。速氏の大學を卒業して、歸郷するまで是に住せり。速氏の大學卒業は明治二十四年なりき。優等第一を以て、卒業式に際し、卒業生總代として答辭を讀む光榮を荷ひ、憲章君多年の苦辛督勵僅

に酬いらるゝを得たり。後更に東京帝國大學講師スクリバ氏の助手たる二年。明治二十六年十一月徳島に歸れり。

病院經營

明治二十六年。君既に四十六歳。久しく都門の黄塵に馳走して、事は多く志と違ふ。夢は乃ち故山に向つて結ひ易し。速氏亦錦衣故老を見むの意なきに非す。されば愈々地を徳島にトし、病院を開きて、故國の刀圭界に貢獻する所あらんと決意しつ。君は其の開院準備を整へむため、年の八月始めて鄕里に歸れり。時偶々徳島市前川町檜屋の濱の旗亭水月樓の業を廢するあり。其の建築宏壯とは云ふ能はされども、私立病院と爲すに足る。乃ち之を買收して工作を施し、十一月を以て開業す。君は院主にして會計及ひ經營の事を掌り、速氏は院長として、專ら醫療の任に當る。是れ實に徳島縣下に於ける私立病院の嚆矢なり。三宅氏歷代、既に外科を以て醫名を馳す、速氏も亦最も斯術に長す。而して設備は實に最新の式に係る。其の未た

開業せざるに、名聲は業既に縣下に噪ぐ。業を開くに及ひては門外市の如く、治を請ふもの遠近より殺到し、數月ならすして院舍狹隘を告くるに至る。乃ち大に擴張の事を議す。偶々舊縣立病院たりし好生社の土地賣却の說有り。君直に之が買收の事を交渉し、翌明治二十七年三月を以て賣買の契約を了りぬ。好生社の地面積二段餘歩あり、尚名東郡郡有地若干歩を同時に買收し、其の他好生の建築物二棟、附屬の器具機械をも亦併せて購ひ得たり。斯くて玄關、診察所、病室等を新築し、其の年十月を以て之に移れり。三宅病院の基礎始めて確立しぬ。

明治二十七八年の戰役は、新に泰西の文明を吸收したる我が國民の、始めて其の應用を試む可き好機會なりき。之を豐公が征韓以來の對外大運動と爲す。されは民心の緊張亦其の極に達し、人々奉公を念はざるなし。君乃ち速氏と共に、縣知事村上義雄氏に謀り、篤志看護婦養成の事を畫し、速氏は自ら之を率ゐて廣島に赴き、君は其の留守として大に力むる所あり

き。
明治三十一年、速氏外遊の事あり。獨逸國に至り、先つ南獨逸ハイデルベルヒ大學に入り、次で北獨逸ブレースラウ大學に學ぶ。居ること三年、研究論文を提出して、醫學博士を授けらる。此間病院は、親戚なる眼科醫學士武市機七郎氏に貸付し、經營は舊の如し。速氏歸朝するや、大阪府立醫學校長たる西澤大阪府書記官、其の令名を聞き、該校附屬病院の外科醫長たらむとを請ふ。乃ち之に應じ、毎週土曜日、日曜日には歸縣して三宅病院の診療に從ひ、其の他は大阪に留りて府立病院の事に當る。其の間醫員日比野勉氏を三宅病院醫員の主任と爲せり。九州醫科大學の創立せらるゝや、學長大森豐治氏、速氏を招きて教授となさむとす。大森氏は福岡縣立病院長として獨逸に遊びし時、偶々速氏と相識り、深く敬重する所ありしを以て也。速氏、文部省留學生として獨逸に遊ぶとを條件として其の聘に應じ、乃ち重ねて獨逸に至り、伯林及ひブレースラウ大學に學ふと一年有半。其の間、醫員橋

本安次郎氏、三宅病院の醫務を統轄せり。速氏歸朝するや、直に九州醫科大學外科部長たり。明治三十九年、醫學士田中俊太氏を撰抜して三宅病院長となし、爾後今日に至る。其の間君は常に院主として事務に鞅掌せしが、明治四十四年に至り、脚氣症に惱み、加ふるに老衰を以てし、行臥稍々意の如くならず、多く机邊に隱れて、專ら書籍に親めり。

臨終

大正三年秋漸く闌けて、空堦絡緯を催し、蕉葉露亦繁からんとす。時は十月中旬、君病革まり、頻りに姪石原六郎氏を招く。六郎氏到るや、具さに後事を語る。曰く、病院の收入は總て金庫の裡に納めたり、此は總て速に與へられたしと。六郎氏問うて曰く、病院の會計は君の管せし所、其の收入は卽ち君の所得たり。且つ之を速氏に與へなば、遺族の生計は何に依りて之を支へむと。君頭を掉りて曰く、病院は速の力に由りて始めて成れり、予は只其の收支を管せしのみ、之を受く可からず。妻は速當に之を扶養すべしと。六郎氏又問

ふ。君か家督を續く可き者は誰ぞと。君笑うて曰く、予は一代にて可なり、何の後繼を要する者ぞ。峯の松風、葉末の露、後を弔はんは人の自ら有る可し。葬儀の如きは、簡單にして質素なるべし。墓石は戸主の如き大なる者を設く可からず。債權は凡て之れを拋棄して記帳を抹消せよと。言ひ了りて心降るが如く、後數日瀛焉として眠るか如く逝きぬ。享年六十有七。時は大正三年十月十四日なりき。「聖德太子の御墓をかねてつかせ給ひける時も、こゝをきれ、かしこを絶て、子孫あらせしと思ふなりと侍りけるとかや」とは雙ヶ岡の法師が書きたるものに見えたり。憲章君の此の心事の高潔にして而も奇矯に失せざる。尊しとも尊しと謂ふ可き也。

遺骸は、德島竹林に於て茶毘に附し、後更めて、葬儀を、其の出生の地美馬郡舞中島の菩提寺光泉寺に行ふ。遠近來り會し哀惜せさるなし。遺骨は三宅氏累代の塋域に葬る。法謚を宏德院仁海憲章居士と云ふ。

遺族

憲章君既に子孫をして、其の後を繼承せしむるに意なし。されば遺族といふは、只令室以登子刀自あるのみ。刀自は嘉永四年江戶に生る。資性溫良にして貞淑なり。然れども元武人の家に生れて、武士道的教訓を受けぬ。乃ち尋常幗巾者流に異り。意志堅實にして、才氣亦煥發す。內助の効最も多し。憲章君、事業の經營に失敗する幾度。貧苦身に迫るも、刀自泰然動かず。常に溫容以て、之を慰め、克く家政を經理して、後顧の憂無からしむ。嘗て東京蠣殼丁に家せし時、朋有り遠方より來る。偶々窮乏其の極に達し、囊中復一物無し。客は主人と、舊を語り、新を談し、快興盡くる所を知らず。既にして午時なり。刀自やがて酒肴を供へて之を饗す。酒は是れ芳冽、下物は是れ新鮮、到底貧厨の辨する所に非ず。憲章君、心私かに之を怪しむ。客去りて後、刀自に問ふ。刀自答へて曰く、幸に多年葡萄酒、麥酒の空罎、床下に堆積する有り、不時の費に際らば、錢に代へんことを期せり、今日果して其の用有りきと。憲章君大に悅び、其の用意の周到なるを稱せり。

憲章君の、速氏を教育するや、頗る嚴格。常に端然正座して机に對はしめ、苟も欹側するを許さず。夏夜蚊軍襲來するも、之を拂ふに由なし。刀自常に速氏の背後に在りて、陰かに之を逐ひ、憲章君をして敢て知らしめず。速氏深く、感激し、之に仕ふると慈母に於けるが如し。

刀自今や風懷を琴瑟に寄せ、悠々天命を樂んで、以て殘年を終へんとす。心鏡點塵を止めす、明月の如き者有るか如し。

交友

憲章君、晩年多く韜晦し、廣く交友を求めず、門に雜賓無し。而も長者の遊、肝膽相照すもの無きに非ず。其の莫逆は、曰く關寛、曰く村上義雄、曰く壚谷依信、曰く岡本監輔。關氏は藩醫の尤なる者なり、氣骨稜々人生を拯ふを以て任と為す。村上氏は德島縣知事たり、最も力を教育に用ゐ、艮二千石と稱せらる。壚谷氏は、郡長中學校長等に歷任し、情操高潔を以て名有り。岡本氏は卓磊不羈、經世の念憂國の志深く、一身を國事に献

けて吝まさりし人なり。若し其の交る所を以て、其の人と爲りを察するを得べしとせば、憲章君の人格も、亦尋常に非さりしを知る可し。陸軍大將男爵川村景明氏、曾て陸軍特命檢閲使として德島縣に來る。男爵は、憲章君が、東京に帷を下したる時の門下生たり。人の之を知る者有り、憲章君に説きて、男爵を訪問せんとを勸む。憲章君笑うて答へず、遂に顧みる所なかりきと云ふ。聞達を求めず、勢利を趁はさると此の如くなりき。

逸話

魚に非すんば、魚の心を知らす。大丈夫の心事は、大丈夫にして、始めて之を解す。憲章君の、交友多からざる所以か。而して常に君の門に出入し、朝夕其の訓誡に聽きたるは、石原六郎氏なりと云ふ。憲章君の令兄は舞村翁なり。翁の令室は六郎氏の伯母なり。憲章君は即ち六郎氏の叔父に當る。是を以て六郎氏は常に憲章君に親しみ、少時より屢々訓誡を受く。憲章君、性元侃々諤々を喜ぶ。六郎氏苟も非行あれば、直ちに面責

して措かず。六郎氏亦不羈にして氣を負ふ、時には互に論難して相譲らさりきと云ふ。

一日憲章君、六郎氏に説きて曰く、爾が家世々藍商たり。而も今や時勢は一轉せり。我か阿波國産たる蓼藍の販賣のみを株守するは不可なり。仮令祖先の遺業たりとも、前途なきものは之を廢せさる可からず。此際宜しく獨逸所産の洋藍販賣を開始すべしと。六郎氏即ち討論研究、遂に其の説に伏し、直ちに之を實行す。乃ち三宅病院内の一室たる憲章君の寓所を帷幕

として、憲章君の指導と斡旋とを仰き、以て獨逸人と折衝し、始めて日本に於ける獨逸産洋藍發賣權を獲得したり。然れとも阿波藍の販賣は、多年の經營に係り、一時に需用者と絶つ可からず。乃ち漸を以て之を廢せんの策を立てぬ。三木氏森氏等の同業の巨擘、亦同一の方針を採るに至れり。されば洋藍發賣の事も、初めは憲章君の名を以て店舗を開き、憲章君、亦熱心自ら其の事に當る。六郎氏が、森六郎氏と、洋藍販賣の共同經營をなし、一會社を組織するに際りても、憲章

君を社長となしたるは、之に由る。其の祖先の業を棄て洋藍を販賣すへきを説きしが如き、現今よりして之を見れは、敢て異とするに足らさるも、人々尙舊に泥み、新を趁うて時勢と推移するを危みし時に際り、斷乎として之を慫慂せしは、眞に先見の明有る者に非ずんば能はさる所なりとて、他の同業者も嘖々之を稱して止まずと云ふ。石原家の今日有る、憲章君の指導畫策に由る者多しとは、六郎氏の親しく語る所なり。

六郎氏曰く、予の叔父と對するや、每時必す相論爭す。然れども相逢はさること半日、恰も千秋の思ひあり。寂寞の念に堪へず。乃ち又訪問して、其の談論を聞き、智嚢を借る。叔父亦喜んで之を迎へ、曩昔の論爭は全く之を忘れたる者の如く、虛心坦懷、懇切に指教し訓告す。其の洋藍販賣上の權利に關して、獨逸人と爭ひたる時の如き、朝夕指示を仰き、其の機畧縱橫なるに依りて、益を得たると頗る多かりきと。

憲章君の、遺產を擧けて、速氏に歸せしめんとするや、

速氏は辭して曰く、是れ叔父が、病院經理の宜しきを得て、生じたる剩餘なり、予の受く可きに非ずと。仍りて之を舞中島三宅氏宗家の有に移さんとす。宗家の主人彌之次郎氏、其の理由なしとて、復固辭して受けず。更に三宅氏一門の婦人にして、他家に嫁したる者に分たんとす。又皆之を辭す。乃ち別途貯金として、之か保管を銀行に托し、他日之か處理を爲さんとすと。一門皆清廉高潔、蓋し其の家風と謂ふ可きか。山玉を藏して自ら澤有り。三宅氏の名聲嘖々たる故有りと

謂ふ可し。

編し了りて

本書は主として、三宅憲章君を紀傳せんとすにあり。古人曰く。其の人を紀傳して高からざるは、其の蹟を口碑にして朽ちざるに若かずと。予の剪陋を以て、此の活眼達識の士を傳へんとす、或は其の高からさるを恐る。今はたゞ其の事績の堙滅を防がんとするのみ。他日高手の人、更に其の心事を剖判して、之を高うするもの有らば幸なり。

本書を編するに當りて、深く感したるは、所謂人才の

出づるには、氏と育ち、血統と教育、遺傳と環境の、兩つながら偏重偏輕すべからずと云ふ事是れなり。憲章君は、其の事業に於て成功したる者なきも、常に時代の趨勢に一歩を先んじて、奮闘努力したる蹟歴々たり。但醫家に生れて、遺傳と環境と、共に商賈として身を立つるに不利なる者有り。爲に多く失敗を免れざりき。其の教養したる三宅速氏に至りては、氏も育ちも、血統も遺傳も教育も環境も、共に皆有利にして、適材を適所に養ひたる者。博士の今日有る、偶然と謂ふ

可からず。彼の岡本監輔翁撰する所の、三宅玄々先生の碑文を閲し「先生軀幹短小にして胆氣精悍、眼烱々人を射る云々」の文字有るを見、將其の資性豁達英偉と云ひ、外科に長じ、克く貧者に施療したりと云ふを讀めは。是れ醫學博士三宅速氏の事を紀するに非さるかを疑ふ。實に速氏は醫家三宅氏の家系の縮圖にして、憲章君は其の變異の一傍系とも見る可きなり。三宅氏の一門の清廉高潔にして、而も勤勉精勵なるは、更めて謂ふを要せず。憲章君、身を商賈に投ぜしも、

元是れ國家を富さんとするに在りて、一身の榮達に念なし。是を以て、其の事業に失敗するも、全く執著する所なく、更に又新事業に著眼す。謂はば終生研究的態度を以て事に當り、其の研究の結實を收穫する能はさりし者なり。然れども學者として速氏を養ひ、事業家として石原六郎氏を成さしむ。君亦後なしと謂ふ可からず、以て瞑すべき也。

「三宅憲章翁」の後に題す

田所眉東

讀み來り讀み去れば快と不快との矛盾の感に打れた快とは何んぞや翁の决心である不快とは何んぞや翁の不成功である嗚呼人間不平多い缺陷の世界憤るも如何せん今の時は權詐の世なり皮相の世なり浮薄の世なり輕佻の世なり小人物跳梁の世なり吾は斯の如き世に容れられざるを喜ぶと社會に超脱したところに私は翁の人格の崇高なる点を發見

する翁の生涯は失敗の活史である此失敗史が翁の生命で而も權威である翁は實に理想的の人であるが故に餘りに現社會と常に大なる間隔を保つたこれが生涯翁を苦めたのである苦むといふことに進歩活躍の思想は自から含蓄する少くとも翁として社會より認めらるゝ程の功績はないが翁の性格の感化は學者としての三宅博士と富豪としての石原吳鄕氏を生んだ兩氏共に社會に貢献すること甚大である兩氏の腦裏には慥かに翁の人格が宿つて居る仮令翁の肉は土と化しても翁の靈は久遠に不滅であるこれには糸子夫人の內助の功も多々のやうである三宅、石原兩氏の成功をながめた翁は定めて地下に於て忍笑で居るであらう

大正九年三月十日記す

跋

明治三十年余歳二十五ヲ以テ家嚴ノ羈絆ヲ離レ始メテ自立家政ニ當ルヤ翁ハ余ノ年少氣鋭事ヲ誤ルノ恐レヲ懷キ精神的ニ將タ實務的ニ訓諭指導ヲ勤メラル、ヿ多年余素ト匪才徒ラニ氣ヲ負フノミ而シテ志、事ニ伴ハス翁ハ其過去ノ苦キ經驗ニヨリ頭腦周密而カモ明徹ニシテ深慮ニ富ム常ニ余ヲ戒ムルニ隱忍ヲ以テス余深ク之ニ服ス然レトモ翁ノ性ヤ率直ニシテ意氣迸發シ時ニ辛辣ノ概アリ余亦屈

セス辯難論議スルヿ屢ナリシモ相互ノ襟懷ハ光風霽月ノ如ク洒然トシテ毫モ介意スル所ナク補導師事故ノ如シ晩年脚氣症ヲ病ム疾革ナルヤ度々余ヲ枕頭ニ招キ縷々遺言ヲ吐露シテ死後ヲ託セラレ破顔微笑溘然トシテ永別ヲ告ケラレタリ烏兎匆々既ニ七裘葛ヲ經余年齒方サニ四十有八世故ノ閲歷ニ於テ聊カ悟ル所アリ加フルニ昨春圖ラス重病ニ襲ハレ福岡大學病院ニ運ハレテ入院八十餘日從兄三宅速博士及井戶泰博士ノ施療ニヨリ辛ク决死ノ難病ヲ癒スルヿヲ得タリ歸宅後余ハ身ヲ佛門ニ投シ縣南丈六寺豊田明貫禪師ノ法弟トナリ專ラ心身ノ修養ニ勤ム熟ラ〳〵往時ヲ追懷セハ人生浮雲ノ如ク又朝露ノ如シ今ヤ翁ト幽明處ヲ異ニスト雖トモ聲容眼前ニ彷彿トシテ寤寐甞テ忘レス一念翁ノ當時ニ及ヘハ感慨措ク能ハサルモノアリ乃チ恩人翁ノ靈牌ヲ我寺院ニ安置シ翁ノ靈ヲ弔フト共ニ翁ノ傳記ヲ編纂シ隱士トシテノ事蹟ヲ世ニ公ニセムト欲シ親友田所眉東兄ニ謀ル兄ハ更ニ井上羽城氏ニ

介セラレ同氏ノ執筆ニ頼リテ幸ニ本編ノ成ルヲ得タリ氏ハ學德共ニ高ク文章ノ妙夙ニ操觚界ニ著ハル其雄渾ニシテ而カモ流麗ナル筆力ハ翁ノ逸事ヲ寫シ來ツテ餘蘊ナシ是ニ於テ余ハ年來ノ宿志ヲ果シ得テ欣快云フヘカラス只恐ル傳記中余ニ連關スルノ記事多ク過賛固ヨリ當ヲサルヲ余本碌々タル一凡子言フニ足ルナシ又忸怩トシテ顔ニ泚スルノミ

茲ニ余ハ翁ニ對スル關係ノ終始ヲ告白シ本編ノ成レル所以ヲ明ニシ併セテ羽城、眉東両兄ノ深厚ナル同情ト多大ノ煩勞ヲ感謝ス

大正九年三月十一日

於丈六寺僧堂

石原吳鄉識

大正九年十二月二十日印刷
大正九年十二月廿六日發行

（非賣品）

著作者　井上一
徳島縣徳島市徳島町百四十四番地

發行者
印刷者　島正太郎
徳島縣徳島市富田浦町字西富田千四百十六番地ノ一

印刷所　一新印刷部
徳島縣徳島市富田浦町字西富田千三百二十四番地ノ一
電話七〇六番

不許
複製

11
408

終